

小滝橋動物病院グループ

News Letter vol.2

犬と猫のリハビリテーション



犬と猫のリハビリテーション

矢ヶ崎 望¹⁾

小笠原 茂里人¹⁾²⁾

1) 小滝橋動物病院グループ

2) 米国 Certified Canine Rehabilitation Practitioner



リハビリテーションとは

動物のリハビリテーションは、近年その重要性が注目されています。リハビリテーション(rehabilitation)とはラテン語が語源であり、『re:再び』+『habilis:適した、望ましい』と『ation:動作』をつなげて【再び適した状態になること】【本来あるべき状態への回復】などといった意味があります。

人では、手術後の運動機能改善や体力回復のためのリハビリテーションが日常的に行われています。動物でも同じように、神経疾患の手術後には神経機能の回復、整形疾患の手術後には運動機能の回復のために、なるべく早期にリハビリテーションを開始することが推奨されています。※早期リハビリテーションを行う場合は、適切な疼痛管理のもとで実施します。

また、手術後だけでなく、各整形疾患の内科的保存治療の一貫として行うことや、高齢期の動物に対してのQOL向上・維持の目的で実施することもあります。私たちは、手術後の入院期間中だけでなく、退院後も専門外来でオーダーメイドのリハビリテーションをおこなっています。

リハビリテーションの適応

リハビリテーションの適応は整形疾患、神経疾患など多岐にわたります(図1)。当院のリハビリテーション科で診療した疾患を紹介します。

整形疾患

犬：膝蓋骨内方脱臼、膝蓋骨外方脱臼、大腿骨頭壊死症/股関節脱臼による大腿骨頭切除、環軸関節不安定症、断脚による他肢の関節炎、前十字靭帯断裂(TPLO 実施後)、自己免疫性疾患により外科手術不適

リハビリテーションの適応

整形疾患
神経疾患
外科手術後の機能回復
外科手術不適応時の内科的保存療法
進行性疾患のQOLの維持
高齢動物のQOLの向上
疼痛緩和

図1

の前十字靭帯断裂、肩関節不安定症(手術未実施)、手根関節不安定に伴う過伸展、橈骨頭脱臼に伴う過伸展

猫：股関節脱臼による大腿骨頭切除の術後
神経疾患

犬：頸・胸・腰部椎間板ヘルニア、水頭症、脊髄空洞症、肉芽腫性髄膜脳脊髄炎による四肢不全麻痺、クッシング症候群を原因とした偽性ミオトニア症候群、水和髄核逸脱、スイマーパピー症候群、ウォブラー症候群、猫：馬尾症候群の装具保存的治療、脊髄内椎間板ヘルニア、外傷性脊髄損傷に対する背側椎弓切除の術後

進行性疾患

犬：変性性脊髄症、原因未定の筋拘縮

治療の流れ

① 診察：以下の5項目を総合的に評価します。

- 姿勢(立位姿勢やくつろぎ姿勢)
- 運動機能(歩様・立ち上がり・段差への反応)



筋膜リリース



ストレッチ

図2 徒手療法

- 筋骨格、関節(筋肉の張りや痛み・関節可動域など)
- 日常生活動作(排泄・食餌・散歩・グルーミングなど)
- 生活環境(自宅内の環境・生活範囲など)

② 計画

評価した結果から、改善に向けた治療の順番などの計画を立てます。

③ 施術

徒手療法・運動療法・物理療法の中から、その時の症状に対して必要な施術を決定します。運動障害が重度の場合は、徒手療法や物理療法をした後に、回復の程度に合わせて追加の運動療法の必要性を判断します。

④ 通院、自宅療法

通院頻度・回数などを飼い主様と一緒に相談します。自宅でのリハビリテーションが必要な場合は、その方法を指導した後に、飼い主様に練習していただきます。

リハビリテーションの方法

当院でおこなっているリハビリテーションをご紹介します。どの治療法をおこなっていくかは症例ごとに異なり、必要な治療法を組み合わせで行います。

徒手療法(図2)

手で実施するリハビリテーションで、筋膜リリース、ストレッチ、神経筋促通法、感覚受容体刺激などがあります。

筋膜リリースは患肢を庇うことで筋肉が凝り固まった筋肉をほぐします。ストレッチは、筋膜リリース施術後や体幹のねじれがある場合に行います。

運動療法(図3)

文字通り、身体の一部または全体を動かすことで症状の回復、運動機能の回復を促すリハビリテーションで、水中トレッドミルを使用した水中歩行訓練、陸上でのバランス運動などがあります。水中トレッドミルは、ベルトコンベア式の床を任意の速度で可動させることができる機械です。水中歩行訓練は陸上で正常な歩行ができない動物を対象に行います。水の浮力を利用することで、体重負荷を減らし、関節を大きくゆっくり動かすことができます。水中で関節をスムーズに動かすことができるようになると、陸上でも正常に足を使用し始めることができますようになります。また、足の痛みは改善しているものの恐怖心によって着地できない子に対して、足を使い始めるきっかけ作りのためにリハビリテーションプログラムに取り入れることがあります。

物理療法(図4)

「温熱」「冷却」「電気刺激」など物理的なエネルギーを利用して症状の軽減、痛みの回復を促すリハビリテーションです。手術後に疼痛緩和、拘縮抑制、術創治癒促進などの目的で近赤外線治療を行います。退院後に回復が乏しい場合や患肢を庇う場合は、徒手療法と組み合わせ物理療法を実施することもあります。他にも半導体レーザー機を用いた治療法などがあります。



バランスボール

水中トレッドミル

図3 運動療法



近赤外線レーザー機

半導体レーザー機

近赤外線レーザーによる治療

図4 物理療法

さいごに

リハビリテーションは、外科手術後の運動機能の早期回復や、運動機能改善により QOL 維持／向上を非侵襲的にできる治療方法です。動物たちが本来あるべき姿で家族とともに一生を過ごすことができるよう、リハビリテーションでサポートしております。リハビリテーションをご検討する症状を図5にまとめました。これらの症状が認められる場合や、整形外科・神経外科の術後などの治療内容や方針で不安な点があれば当院にご相談ください。

リハビリを検討する動物の症状

- | |
|---------------|
| 背中が曲がっている |
| 歩く速度が遅くなった |
| 歩くときに頭が上下する |
| 歩くときに腰がふらふらする |
| つまづく |
| 階段が登れなくなった |
| 起き上がるときに苦勞する |
| 座るときに苦勞する |
| 足がブルブル震えている |
| 足を挙げている |

図5